

『畸人十篇』の研究(二) : 第三篇・第四篇訳注稿

柴田, 篤
九州大学大学院人文科学研究院哲学部門

<https://doi.org/10.15017/25109>

出版情報 : 哲學年報. 71, pp.143-176, 2012-03-09. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :

哲学年報 第七十一輯 抜刷
平成二十四年三月九日 発行

『畸人十篇』の研究(二)

― 第三篇・第四篇訳注稿 ―

柴
田
篤

『崎人十篇』の研究(二)

— 第三篇・第四篇訳注稿 —

柴 田 篤

はじめに

『崎人十篇』は、イタリア人イエズス会士マテオ・リッチ(号は西泰、一五五二〜一六一〇)が、中国名・利瑪竇まどうとして中国文で著した書物である。上下二巻、全十篇から成る。リッチが実際に中国人士大夫と行った対話を記述したもので、カトリック・キリスト教(天主教)の立場に立つ西洋人の発言内容と、それに対する中国人の反応を記録した貴重な書物と言える。内容としては、人は死をどのように捉えればよいのか、またどのように生きるべきなのか、といった問題が取り上げられている。明末の万曆三十六年(一六〇八)に初刻され、これより五年前に刊行された同じくリッチの手になる『天主実義』^①と共に、中国のみならず日本・朝鮮など東アジアに大きな影響を与えることになる。本稿では、第三篇と第四編の訳注を行うことにする^②。

第三篇と第四篇の対話者は「徐太史」とある。すなわち、明末における代表的中国人天主教徒であり、後に礼部尚書や内閣大学士といった要職に就くことになる徐光啓(字は子先、号は玄扈、一五六二〜一六三三)である^③。「太史」は翰林院の官を称しており、彼は万曆三十二年(一六〇四)に進士となり、同年七月一二日に翰林院庶吉

士に任ぜられ、翰林館に入って教習を受けている。徐光啓は、万曆二十六年（一五九八）に南京で初めてマテオ・リッチに会うが、受洗をしたのは五年後の万曆三十二年（一六〇三）の初めであった。彼が翰林館に入った頃、リッチらは北京で借り屋住まいをしていたが、翌万曆三十三年（一六〇五）に宣武門内の屋敷を買い取り、ここに小聖堂や修練院を持つ住院を作る。徐光啓はこのことに対しても大きな援助を行っている。リッチは、ヨーロッパに書き送った「報告書」^④第五の書・第八章の中で、「ドットール・パオロ（徐光啓）は、神父たちやわたしたちの国の書物の権威を高め、これによってキリスト教の進展をはかること以外に何も考えていない人のようであった。彼はマッテオ神父と相談して、わたしたちの自然科学書を何か翻訳することにした。」と記している^⑤。これは、万曆三四年（一六〇六）秋の頃からのことで、先ずユークリッドの『幾何学原論』の各書の翻訳に着手する。同報告書には、「彼はみずからこれに専念しようと決意して、毎日わたしたちの家を訪れ、三時間から四時間ものあいだ、神父とともにこの仕事にあたった。」とある^⑥。翌万曆三十五年（一六〇七）には、その前半部分を『幾何原本』六巻として出版する。四月には翰林院を結業するが、五月に徐光啓の父親が亡くなったので、服喪のため郷里上海に帰ることになり、万曆三十八年（一六一〇）四月にリッチが北京で逝世したため、両者は再び相見えることがなかった。

『崎人十篇』が出版されたのは、両者が別れた翌年のことであるが、以上のことから見て、第三篇・第四篇の対話は、万曆三三〜三四年（一六〇五〜一六〇六）、徐光啓四十四〜四十五歳（リッチは五十四〜五十五歳）の頃に北京の住院で行われたものと思われる。第四篇の冒頭に、「翌日、翰林院庶吉士である徐光啓が再び私の寓居に訪ねて来て言った」とあるように、連続した二日間の記録であろう。両篇の標題は次の通りである。

第三篇 「常念死候、利行為祥」（常に死の時のことを考え、よく生きることが幸いなことである）

第四篇 「常念死候、備死後審」（常に死の時のことを考え、死後の審判のために準備をする）

標題から分かるように、両篇共に「死を考えながら、より良く生きるには」ということが主題となっている。その意味では、第一篇の「人寿既過、誤猶為有」（人は寿命が過ぎてしまっているのに、まだあると誤解している）、第二篇の「人於今世、惟僑寓耳」（この世は人にとっては仮の宿りに過ぎない）のテーマと繋がり、それを展開させた内容と言える。

第三篇では、人は死が訪れる前に死の備えをすることが重要であり、死の時のことを思うことは我々を悪から解放して善に向かわせる方法であると論じ、死の前、死の時、死の後の三つの苦難について説明した上で、最大の苦難は死後にあると説いている。

第四篇では、前篇の内容を受けて、死後の苦難を免れるために、常に死の時のことを考えれば、五つの良いことがあるとして、それについてリッチが詳細に説明をしている。

リッチは「報告書」第四の書・第十九章の中で、徐光啓のことを、「彼はその模範と、すばらしい生き方と、宗教の問題を論じるときにすぐれた方法によつて、チーナのキリスト教に大きな活力を与えた人物である」⁽⁷⁾と高く評価しているが、イエズス会士らに会う前の徐光啓については、次のように記している。

「文人たちの宗教〔儒教〕では、来世や魂の救済について語られることがほとんどないのを知つて、死後に天国を約束している偶像教や他の宗派の多くの師についた。しかしいづれの師にも満足できなかった。」⁽⁸⁾

この記述によれば、徐光啓が以前から「死後」や「来世」の問題に強い関心を持っていたことが分かる。彼はその後しばらくの時を経て洗礼を受けるが、『畸人十篇』の第三篇・第四篇は、受洗後の徐光啓とリッチとの間で交わされた「生と死」をめぐる貴重な対話の記録とすることができ。

また、第四篇では、特にヨーロッパの説話や故事が数多く引用されており、西洋の故事や文学の中国への流入

を考察する上でも興味深い一篇と言える⁹⁾。

【注】

- (1) 『天主実義』については、拙訳注『天主実義』（『東洋文庫』七二八、二〇〇四年）を参照。
- (2) 成立事情や版本の種類、またその後世への影響などについては、拙稿『畸人十篇』研究序説（『哲学年報』第六十五輯、九州大学、二〇〇六）を参照。また、第一篇・第二篇の訳注は、『畸人十篇』の研究―第一篇・第二篇訳注―（『哲学年報』第六十八輯、九州大学、二〇〇九）を参照。
- (3) 徐光啓については、『徐光啓全集』（朱維鈺・李天綱編、上海古籍出版社、二〇一〇）及び同第十卷所収「増補徐光啓年譜」（梁家勉編、李天綱増補）を参照。また、後述の『幾何原本』については、安大玉『明末西洋科学東伝史：『天学初函』器編の研究』（知泉書館、二〇〇七）を参照。
- (4) マテオ・リッチの「報告書」の原題は、Matteo Ricci, Della entrata della compagnia di Gesù e christianità nella Cina（『イエスス会によるキリスト教のチーナ布教について』）で、本稿での引用は、川名公平訳『中国キリスト教布教史一・二』（岩波書店、『大航海時代叢書』第Ⅱ期、第8・9巻所収、一九八二・一九八三）による。
- (5) 『中国キリスト教布教史二』七一頁。
- (6) 同右、七二頁。
- (7) 『中国キリスト教布教史一』五七二頁。
- (8) 同右。
- (9) この問題については、李爽學『中國晚明與歐洲文學―明末耶穌會古典型證故事考証』（中央研究院聯經出版公司、二〇〇五）に詳細な研究がある。

【凡例】

- 一、本稿は、明の利瑪竇（マテオ・リッチ）著『畸人十篇』上下二卷（一六〇八年初刻）の現代語訳である。
- 一、底本としては、明の李之藻が編纂した『天学初函』（二六・二九年刊）理編所収本（燕貽堂較梓版）を用いた。
- 一、底本の文字の誤りについては、諸版本を参考にして、これを改めた。但し、清末刊本（改竄本）との異同については触れていない。

一、本文には改行がないが、文章が長いところは、読みやすいように適宜改行を施した。
一、訳文はできるだけ平易な現代語表記を心掛けた。「」内は原文にない語句を補ったところを、()内は語句の簡単な説明を施したところを、それぞれ示した。

一、訳文中、キリスト教で説く「神」については、「天主」という訳語で統一した。但し、原文に「天主」とないものについては、()内に原文を表記した。

一、利瑪竇の独特の用語や用法、また西洋の固有名詞などは、注で原文を示した。

一、注に引用する『旧約聖書』と『新約聖書』の訳語は、『聖書 新共同訳』(日本聖書協会発行、一九八七)に依った。ただし、本文中の引用表記については、原文に忠実に現代語訳した。

現代語訳 『畸人十篇』 上巻 (承前)

第三篇 「常に死の時のことを考え、よく生きることが幸いなことである」

私が翰林院庶吉士である徐光啓かんりしに尋ねて言った、「中国では官僚知識人も一般庶民も誰でも死の時のことを怖れて、話をするときでも忌み避けようとはしますが、どういふことなのでしょうか」と。

「徐光啓が」答えて言った、「無知蒙昧なのです。賢い者はそんなことはありません。あなたのお国ではいかがですか」と。

私が「答えて」言った、「そもそも死の時というのは、何よりも厳粛なものです。人生最後の境地であり、人間の最終地点ですから、当然畏れるべきものです。しかし、我が国で学問に志す者は、死が自分の所にやってくるときに、自分が何の備えもしていないことを常に懼れるのです。ですから、いつでも死の時のことを考えて、そのことについて学習し討論することを怠らないのです。死が訪れないうちに、あらかじめ対処し、やって来た

ら安らかに死を迎えるのです。人には誕生と死亡の両端があつて、その間を生きていくのです。それはちようど天に北極と南極があつて、天の下でまわりめぐつていようなもので、そのことを決して忘れることはできません。生と死をつかさどる方は、いつ命が尽きるのかを人に教えてはくれません。それは人が日々に備えをするように望んでいるのです。備えがあれば失敗することはありません^①。『聖書』には、「見張つていなさい。それは盗人のようにやつて来る。盗人が隙を窺つているのに、主人が気がつかないだけだ」とあります^②。ですから、「誰かの」訃報を聞くと、誰でも驚いて「だれそれが死んだのか」と言います。「だれそれが死んだのか」と言うのは、その人が死ぬとは全く思つてもいなくなつたからです。天主教（聖教）で聖人と称される人々は、常に死の時のことについて、悪を阻み善に奮い立たせる最上の手本である、と自らの心に言わない者はいません」と。

徐光啓が言った、「死とは」そのように差し迫つたものでしょうか」と。

私が「答えて」言った、「生きている者が分かることで、必ず死ぬということより明らかではありません。分らないことで、いつ死ぬかということより明らかでないことはありません。身分の高い王族であろうと身分の低い従僕であろうと、すべて人の子は、一体誰が一日を過ごさないことがありますか。夜にならない朝や、朝にならない夜があるでしょうか。また、誰が甲「という所」に居ながら乙「という所」に居ることができませんか。あなたは、死の時があなたをどこかで待つていふことを知らないのです。『むしろ』あなたがどこでもそれを待つべきなのです。ですから、智恵ある者は常に死と出会うことを願ひ、そのことを人生とするのです。世間の人々の大きな誤りは、死を遠い先のことだと考えていることなのです。そもそも我が身がいとも死におおわれているということに、誰も気づいていません。私はもう大半は死んでしまつていふのです。過ぎ去りし年月は、すべて死によつて持ち去られているのです。航海をしている旅人は、船の中で立つたり座つたり寝たり食べたりして、動かずに止まつていふかのようですが、その身は昼も夜も移動して、わずかでも止まつ

ていることはないのです。その上、欲すると否とにかかわらず、岸に着くや上陸しないわけにはいかないのです。二艘ふたぶねの船が出会うと、両者の間では相手の船が動いていて、自分の船は止まっているかのように見えますが、実はどちらも動いているのです。世間の人々は、ともすると、「私の命は今日このようにあるし、明日もこのようにあるのだ」と誤って言いますが、自分の命は実は休みなく浮き沈みして止まることがないのです。「彼は病気になるって死んだが、私は健康で生きている」と誤解して言いますが、彼も私も一瞬一瞬共に死に向かっているのです。柄杓ひしゃくで瓶びんの水を汲み尽くしていくときに、最後の一滴が瓶かめの水を汲み尽くしたと言えましょうか。そうではありません。最初から最後まで、一滴ごとひとしずくごとにそれを汲み尽くしていったのです。そもそも人の命も最後の日が終わりだと言いますが、実は毎日毎日が終わりなのです。そもそも私のこの生命は西江の水のようなものではありません。川の水には水源があり、下流に流れていきますが、上流に水が増えれば、川の水はいつまでも涸かわれることがありません。生きている人は、「蠟燭ろうそくの」ともしびのようなものにほかなりません。常に消えていき、誰も油を加えることはできません。ですから、次第に燃えてなくなってしまうのです。人は幼少の時には青年になることを願ひ、青年になると壮年になることを願ひますが、それはいずれも死を願っていることなのです。壮年になったのちには、やがて年老いていき、年老いていったのちにはやがて死ぬのです。一体誰が道を歩いているとしながら、その「道がたどりつく」場所に行きたくないなどということがありましようか。そういうことですから、「この世界にいる」数多くの人々は、一体死んだ人がこの世界に身を寄せて生きているのでしょうか、それとも生きている人がこの世界に身を寄せて死んでいるのでしょうか、私には分かりません」と。

徐光啓が言った、「あなたの奥深い言葉はすべて真実です。『ですが』今、世間の人々が考えていることは、「私の思いと言葉と行いがすべて善に向かえば善になる。もし死の時の災いを考えるならば、心『の思い』も口『から出る言葉』も悪いものになってしまふ」ということなのです。ですから、彼らは死のこと『を考えた話した

りすること」を避けるのです」と。

私が言った、「そうではありません。私に幸福が与えられれば幸福になり、災禍が与えられれば災禍になります。死の時を考える思いは、私を助けることができ、私を悪から解放して善に向かわせるもので、これ以上の幸いはこの世にありません。世間の人々が「道がたどりつく」場所と言っているところは、私に言わせるならば、その場所に至る道なのです。その場所に到達したいのであれば、先ずその道に由らなければならず、ただその道が困難なのです。あなたは、善を行うのは流れをさかのぼって船をやるようなものだというをご存知でしょうか。死の時が近づいていることをいつも考えて、心がわがままにならないようにするのです。まして、死の時のことを考えるならば、心「の思い」も口「から出る言葉」も悪いものになつてしまふなどと懼れて、それを口にするのを避けるなどというのは、悪を増長させる入口でないことがありますか。およそ欲に従う愚か者は、大抵死が近づいていることを忘れてるので、自分は長寿だと思つていますが、それは思いがけない幸せに過ぎないのです。「それに対して」善を行う者は、自分が長寿であるよりも夭折ようせつであると考えます。この世の中の人々は、矢のように鳥のように、速やかに飛んで跡形もありません。また影のように夢のように、持つべき形体もありません。それなのに人々は永遠に存在するかのよう、ここで大業を行おうとするのです。何と哀しいことでしょうか。

南方にエジプト^③という国があります。古代の法では、墳墓を造らなければ住まいを造ることができませんでした。その土地では、居室は狭隘きょうがいですが墳墓は广大で、彼らは居室は数年間の仮住まいだが、永遠の住みかは墳墓に他ならない、と考えていました。ですから、墳墓を造ることを急務として飾り立てました。

その昔、我が国にヤコボ^④という隠士がおりました。家を棄てて放浪し、一切を棄て去り、人には常軌を逸した者だと見なされてきました。ある友人が四羽の鶏を買つて、自分の家に持つて帰るように「ヤコボに」頼みま

した。ヤコボは了解して、直ちに持つて帰りました。「ところが」その友人が家に帰つて尋ねると、鶏はありませんでしたので、ヤコボが自分をだましたなと思ひました。何日かして「ヤコボに」道で出会つたので、「この間、君に鶏を預けたが、一体どこにあるのだ」と問ひたしました。「するとヤコボは」「君は君の家に持つて帰るように頼んだではないか。一体どこにあるのだ」と言ひました。その友人は訝しく思つて、彼を連れて一緒に行つたところ、自分の生前墓の中に四羽の鶏がいました。友人は益々訝しく思つて、「私は君に私の家に持つて帰るように「鶏を」預けたのに、どうして墓の中に置いたりするのだ」と言ひました。「するとヤコボは」「あれは君の仮の宿、これが君の家だよ」と言ひました。ああ、ヤコボは常軌を逸して居るでしょうか。このようにして私たちに警告を發しているのです。何と深いことではありませんか。

そもそも造物者「である天主」は人を他の万類を越える最も高貴な存在として造られましたが、その寿命が植物や動物にも及ばないのは、どういふお考えなのでしょう。今の人の寿命が昔の人の寿命よりも短いのは、造物者「である天主」が人々を憐れまれたからに他なりません。あなたは、時代が下れば下るほど、世の中は益々悪くなると思ひませんか。父親たちの世の中は、祖先が生きた世の中に及ばず、私たちの世の中は祖先や父親たちの世の中に及びませんし、私たち以後、益々悪い状態にしようとするもの「がいるとしたら、それ」は子孫たちです。人が過ちを増し加え、天が罰を増し加えるのは、不善「なる行い」がもたらす禍わざいです。そうであれば、人はこの世に生まれて、生涯禍わざいにわずらわされるばかりです。ただ生きているというばかりで、実際は苦しみと共に生まれ、苦しみと共に死んでいくのです。「かりに」百年「生きる人生」であつても、それは世の中を生きるのではなく、苦しみ多き海のような世の中を生きる⑤のですから、死は苦しみ多き海を渡りきつて、岸边にたどり着こうとすることではないでしょうか。もし長い歳月を生きるのであれば、それは我が家に帰ろうとするのを逆風が邪魔をするようなものではないでしょうか。

ああ、この世の中で命が短い人は、苦しみを減らし、罪を少なくするのですから、死は災禍ではなく、むしろ災禍が終わるところに他なりません。刑罰がなされずに、刑罰が赦されるようなものに他なりません。君子は、天主が私をこの世に預けているのは仮住まいとしてであつて、永遠の住まいとしてではないということをよく知っていますので、この世界を仮の宿として、我が家とは見なさないのです。私のとこしえの人生は「この世とは」別に安樂なところがあり、それが私の永遠の住まいなのです。さらに、この世の寿命がたとえ長くても、永世不滅にくらべれば、短いことは言うまでもありません。『輿地総誌』⁽⁶⁾にはナイル川⁽⁷⁾の浜に鳥がいて、太陽が昇ると共に生まれ、太陽が沈むと共に死に、生命の盛んな時は昼間だけである、と記されています。「その鳥が」卯の時（午前六時）はひなで、たまたまその時に死ねば若死であり、辰と巳の時（午前八時から十時）は幼少期と青年期であつて、真昼を見ることができれば五十歳から白髪混じりの年齢であり、未の時（午後二時）は老人であり、幸いにも申の時（午後四時）や酉の時（午後六時）まで生きられれば、七十、八十、九十の老人であります。「それは」わずか百年の中に区切りをつけるのと何の違いがあるでしょうか。ですから、永遠に生きることが願う者は、終わりのある人生をわずかの間のものだと思なします。「そして」このわずかないとぐちを、死後において完全な幸福を得るか、巨大な不幸を得るか、に關係深いものと見なします。ですから、「短い人生を」慎まないわけにはいかないのです。

おしなべて長寿を望む者は、「長生きをすること」人生を終了させることを願うばかりですが、賢い人は、死に至る前に人生を完了させます。愚か者となると、死んでしまつても、人生を始めることができません。そして、急いですべき大切なことを、すべて明日に先送りしてしまひます。明日に先送りしたものは、必ず実行できないということを知らないのです。明日になれば、明日は明日ではなく今日となりますから、明日は既に過ぎ去つてしまつて居るのです。それは、まさに水車^{みずぐるま}の水筒^{つつ}のようなもので、前後の筒が続いており、次の筒が上を

押さえると、前の筒は既に傾いています。宴席でご馳走を百もの食器に用意した時に、「その中の一つには毒が入っている。食べれば必ず死ぬ」と言われれば、この百もの食器「の中の料理」を、どれ一つとして満足に味わうことはできません。私は数日間の命「しか残されていない」としたら、必ずある日死ぬことになるかと分かっています、それがいつの日であるのかは分からないのであるから、一つ一つ疑って、楽しみに迷わないようにしなければなりません。

そもそも人の命は、短いというだけではなく、短い中で、「それが終わるのが」一体いつであるのか、全く時期が分からないのです。誰が病気のために死ぬのか、「あるいは」誰が押しつぶされたり、溺れたり、焼けたりして死ぬのか、「また」誰が街を歩いていて、たまたま飛んできた瓦が頭に当たったり、あるいは風邪を引いて死んだりするのか、誰が門を出て、たまたまつまずいて、倒れて起きあがれなくなるか、誰が腹痛を起こし、一杯の煎じ薬を誤って飲み死んでしまうのか、誰が夜に妻を娶って翌朝には自分が死んでしまうのか、など全く分からないことなのです。塵や埃は散りやすく、宝玉は砕けやすいものですが、それでも人の命の危うさには比べようありません。私の命は、一日として確かなものはありませんが、愚かな人は、あたかも寿命が自分の手中に握られて自由になるかのように、長年にわたる計画を立てて、それによって仕事を分けて行おうとします。ちようど、衣服を作る者が机の上に絹を置いてこれを裁断し、幾らかを上着に、幾らかを裳褌にと分けて作るうとするかのようにです。何と愚かなことではありませんか。

ああ、人は年齢が行っているかどうか、身体が強いかどうかにかかわらず、見るところ、死亡するのは幼年の者の方が老人よりも多く、強者の方が弱者よりも多いのです。あなたが焼物の店に入って、沢山の焼物を見れば、大きい小さい、厚い薄いの違いがあり、この中でどれが先に壊れるでしょうかと尋ねたとします。「薄いものが先に壊れ、厚いものが後で壊れます」とは決して言われません。また、「先に造られたものが先に壊れ、

後で造られたものが後で壊れます」とも言われないうでしよう。「先に地面に落ちたものです」と答えられるだけです。聖パウロ⁽⁸⁾は、人の肉体と精神⁽⁹⁾とについてこう語っています、「私たちは金や宝を、土でできた焼物の器の中に納めています」と⁽¹⁰⁾。つまり、この肉体は土でできた器であり、壊れやすいものなのです。どうして若いとか年を取っているかなどを問題にしましょうか。私たちが絵画を見て、手で書き写せば、画いたものはすべて近くに見えます。しかし、上手な画家が手法を用いて色を加減して画けば、我々の目が錯覚して、遠くに見えたり近くに見えたりします。世界は一枚の絵に他なりません。すべての人は誰でも死に近く、遠い人などはいません。[ですから]目の錯覚を信じて、間違つて「死から」遠いとか近いとか言うことはできないのです。

以上のことから見るならば、「今日は私が受けた命が終わる日で、この日を善く用いることはできない」とは言えないのです。年が若い時に沢山の善行を行うならば、あらかじめ長寿の利益を得ることになります。年寄りになるまで善を行うことができなければ、どうして長寿の利益を失わないことがありますか。人の寿命は常に短く、人の欲望は常に盛んなものです。その寿命が短い者は、その欲望が盛んであることを戒めるものです。もし行く先が短く、止まるべきところが遠くないということが分かつていれば、どうして一生懸命に資金を集めたりしましょうか。年を取る前に人生をよく生きることを考え、年を取ったら死をよく受け入れることを考えれば、それで十分なのです。年老いた者が、蓄財に努力するのは、何と奇妙なことではないでしょうか。家が近くなればなるほど、路銀にあくせくする必要がありませんか。テーベ⁽¹⁾の法では、八十歳になった老人は、医者にかかることを許されませんでした。今は生きることを考えるべき時ではなく、死に備えるべき時に他ならないということなのです。

立派な人物でも、時として不幸なことがあります。自分が人生をよく生きることができなければ、どうして死をよく受け入れないようにすることができましようか。私は生も死も善いものであることを願いますが、もし

両方は得ることができないのであれば、むしろ善き死を願いましょう。死が光輝いていれば、生も光輝いて終わることができるよう。昔、西洋である人がこう尋ねました。「優れた人々の寿命はこの上もなく長いのでしようか」と。「それに対して」こう答えました。「この上もなく善い時に至るのです」と。さらに尋ねました。「立派な人はどれほどの人生を生きるのでしょうか」と。こう答えました。「生きることができる限度までです」と。辣責得満¹²は、西洋の名国ですが、その風俗では生と死を別のものと見なさず、理の当否だけを問題にします。詩人が詩の中でこう詠^{うた}いました。「兵士、戦陣に赴き、命を落とさんよりは、むしろ剣を捨てよ」と。これを聞いた当局者は、「この詩人を」大罪として、流刑に処しました。その影響は宮中にまで及び、誰もが死を軽んじて義を尊ぶようになりました。私の国（イタリヤ）の歴史書にこのような記載があります。ある母親に子どもがいて、出征して戦死しました。ある人がその母親に対して、「子どもが死んだのは、国の不幸ですね」と告げました。母親は静かに座って身じろぎもせずと言いました。「私は今日の日のためにあの子を生みました。彼の人生はこれで十分です」と。以上のことから言えば、次のことが分かります。この世の人生はわずかな間のものですが、悪いや苦しみは実に深いものがあります。歳月はしだいに過ぎ去っていきますが、人生の危うさやはかなさは他に比べようもないものがあります。ですから、人生は生きているようで実は死んだようなものなのです。この道理は非常に明らかであって、疑いようのないものなのです。

しかし、この世界には他の人生はありません。知覚し運動することによって生きていくしかありません。それを人生とする以上は、「その人を形作っている」気がなくなり命が終わることによって死なないわけにはいきません。ただ、生ある者は、いつもこの死の時のことを考えなければなりません。それを考えることは、生きていくことにとって非常に有益なことなのです。ですから、今ここに死の有り様について概略を掲げましょう。そもそも死の時には、三つの苦難があります。一つは死の前に、一つは死の間際^{まぎわ}に、一つは死の後にあるのです。

人はまさに死なんとする時、激しい病に懼かつて治療することができない状態になると、良友たちは涙を流し、耳に口を寄せて語りかけます。「死後のことで頼みたいことがあるれば、すぐに言いなさい。「あなたの」命はもうなくなろうとしているのです」と。私がしとねの中からこのような言葉を聞けば、懼れおののくばかりで、死後どうなるかも分からず、ただ黙つてため息をついてこう言うばかりです。「月日は過ぎ去つていき、私は再びそれを見ることは永遠にない。私が愛した豊饒な田畑や広大な屋敷、筐はこ一杯の宝物は、「もはや」私のものではなく、他人のために貯えられている。妻や子どもたちとも再び相い集うことはない。愛情があつても何の役にも立たない。ああ、過ぎ去りし幾ばくかの歳月は、たちまち稲妻のように去つていき、今や私を疲れさせるばかりだ」と。思うに、かつて非常に愛したのも、今それを見れば、心を悲しませるばかりです。あれば楽しみ、なくなると悲しむのであれば、以前は愛したものが多く、今は死んだものが多いのです。ですから、賢妻や孝子は、死の時に当たつて見るに忍びず、避け隠れるのです。それは、見れば双方の痛み哀しみが増すばかりだからです。友人たちは、棺桶を準備したり、喪服を作つたりしますし、親戚たちは、家具をしまつたり、宝の箱を守つたりします。私は寢床で寝返りを打つて、憂いや悩みのうちふさがれるばかりです。これが死ぬ前「の苦しみ」なのです。死は他でもありません、靈魂①と肉体が分離することに他なりません。およそ二つのものがぴつたりと合致しているもので、靈魂②と肉体ほど密接なものはありません。ぴつたりと合致していれば、これを分けるのは非常に困難です。二人の友人が一緒に旅をしていると、分かれ道に来てもそれでも別れを惜しみます。ましてや、一生のあいだ一体となっている「靈魂と肉体の」交わりにおいては言うまでもありません。前身の色つやはなくなり、顔つきは目が落ち込み、鼻は角張り、口はどす黒くなり、耳は乾き足は冷たくなり、脈は乱れ心臓はどきどきし、体中から汗が流れだす様子が分かります。何と哀しいことではないでしょうか。そもそも人は母親の苦痛によつて生まれてきて、自分の苦痛によつて死んでいくのです。生も死もどちらも苦痛ですが、我が身にとつて

は死ぬときの苦痛がとりわけ痛切なのです。臨終に際しては、天を仰いで我が生涯に対する天主（天帝）の怒りを見、伏しては一生の歳月がすべて悪をなすことに費やされたことを見、前を向いては果てしなく暗い道を見つめ、下を向いては地獄の苦しい谷へと続く門が、大きく口を開けて私を飲み込もうとするのを見ています。左右を見まわすと、沢山の悪魔¹⁵が私の靈魂¹⁶が肉体から離れるのを待っているのが見えます。何と痛ましいことでしょうか。この時において、進もうと思っても耐えられず、退こうと思ってもできず、後悔しようとしても間に合わず、結局は人生を恨んで死んでいくだけなのです。これが死の間際「の苦しみ」なのです。

死んだ後となると、その思いと苦しみは、もっと激しいものがあります。なぜならば、死んだ後、私という存在は魂と魄¹⁷とだけになります。魄は屍となり、屍は腐った肉となり、腐った肉には蛆虫¹⁸がわき、蛆虫は死んで土に帰ります。これは、賢者であつてもなくても違いはありません。

続いて悪人の靈魂¹⁸についてご覧ください。それは肉体を離れたとたんに幽陰な異界に移つて、たちまち天地の主の厳肅なる台座の御前に置かれ、一生の行いが審判を受けますので、すべての記録が出され、「そこには生涯の」行いが残すところなく詳しく記されているのです。ここでは、不正に財産を得たり、不浄な楽しみに耽つたり、法を枉¹⁹げて君主を欺き、残虐な行為で人民を虐げ、私欲のままに身寄りのない者や幼い者を傷つけたり奪つたりしたことは、すべてその報いを受けます。「さらに」ここでは、神妙な道¹⁹を乱し、天主（上帝）に逆らい「これを」侮り、むやみに異端を尊び、世間を偽り欺いて、畏れはばかることもなかったならば、天主の御威光が上にあつて罰を下されるのであつて、懼れおののいてもどうすることもできず、逃れようもないのです。そこでは、愚か者が覆い隠そうとする醜い思いや、表向きは清廉でも実は貪欲であつたり、うわべは正義を装つても中味は邪悪を生み出したり、過ちを知つても改めようとしなかつたり²⁰、正しいことを見ても従おうとしなかつたり²¹といった、隅や暗闇に隠れた様々なことがらで、心中に隠された不正なはかりごとや、礼に外れた私

欲、法に背いた思いなど、人目に付かないことがらが、一つ一つ露わになつて覆い隠すことができなくなり、天地の間の万物と私自身の心が、すべて私「の悪事」をあばいて証明するならば、私はどうしてそれを拒むことができませんか。生前、天主の憐れみ深さや寛大さをよく知っていても、ここに至つて始めて天主の怒りと威厳とを知るのです。そうであれば、私はどこに祈り求めたらよいのでしょうか。誰がここから解放し救つてくれるのでしょうか。そこで始めて、財貨は既になく、ただ道理を犯して財貨を得た罪が残っているばかりで、汚れた樂しみの味わいは速やかに過ぎ去り、汚れた樂しみの罪が永遠に残っている、ということが分かるのです。「ここに至れば」傲慢な気概は、既に風に吹きさらわれ、傲慢さが招いた天罰²²だけが残つて、永遠に我が身を離れることはないのです。ですから、己を恨み天を怨むばかりで、悩み悶^たえて無限の災いを受けます。ああ、「その災いは」終わりがありません。これが苦難の中でも最大の苦難であり、死んだ後にある「苦しみな」のです」。

【注】

(1) 『尚書』説命中篇に、「備え有れば患い無し」とある。

(2) 『新約聖書』の「マタイによる福音書」第24章42〜44節にイエスの言葉として、「だから、目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が帰つて来られるのか、あなたがたには分からないからである。このことをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒が夜のいつごろやってくるかを知っていたら、目を覚ましていて、みすみす自分の家に押し入らせはしないだろう。だから、あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」とある。これは、終末、世の終わりの時、主の日、キリストの来臨(再臨)について述べた言葉である。このイエスの言葉を踏まえて、同じく「テサロニケの信徒への手紙一」第5章1〜2節には、「兄弟たち、その時と時期についてあなたがたには書き記す必要はありません。盗人が夜やって来るように、主の日は来るということを、あなたがた自身よく知っているからです。」と、また同じく「ペトロの手紙二」第3章10節には、「主の日は盗人のようにやって来ます。」とある。『新約聖書』の最後に位置する「ヨハネの黙示録」第3章2〜3節にも、「目を覚ませ。…だから、どのように受け、また聞いたか思い

起こして、それを守り抜き、かつ悔い改めよ。もし目を覚ましていないなら、わたしは盗人のように行くであろう。わたしがいつあな
たのところへ行くか、あなたは決して分からない。」とある。

- (3) 原文には、「黒人多」とある。
- (4) 原文には、「雅哥般」とある。この話の典拠は未詳。
- (5) 原文には、「度苦海」(苦海を度る)とある。仏教用語で、際限ない苦しみに満ちた現実世界を海にたとえた言葉。
- (6) 興地とは大地、すなわち全世界のこと。リッチはヨーロッパ製の世界地図を中国に伝え、万曆十二年(一五八四)には漢字を用いた『山海輿地全図』を肇慶で出版し、大いに反響を呼ぶ(現存せず)。その後、修訂が加えられ、『世界図志』、『世界図記』、『興地全図』、『兩儀玄覽図』等と改称される。万曆二十九年(一六〇二)、リッチは万曆帝に『万国図志』として献呈する(艾儒略(ジュリオ・アレーニ)の『職方外紀自序』には、「吾が友利氏、『万国図志』を齎進す」とある)。翌年(一六〇三)、李之藻は序文を書いて、北京で『坤輿万国全図』として出版する。鮎沢信太郎『地理学史の研究』(愛日書院 一九四八)、原書房再刊、一九八〇)、朱維鈞主編『利瑪竇中文著訳集』(香港城市大学、二〇〇一)所収『坤輿万国全図』「簡介」を参照。なお、『興地総誌』が何を指すかは不詳。
- (7) 原文には、「泥羅河」とある。
- (8) 原文には、「葆禄聖人」とある。パウロ(紀元前後より六〇頃)は、小アジアのタルソ出身のユダヤ人で、もとサウロと言い、若い頃にフアリサイ派のユダヤ教徒としてイエスの弟子たちを迫害したが、後に回心してイエスの教えをギリシア・ローマ社会にまで広める伝道者となる(『新約聖書』の『使徒言行録』を参照)。ローマで処刑され、後に聖人とされる。
- (9) 原文には、「身」と「神」とある。
- (10) 『新約聖書』の「コリントの信徒への手紙二」第4章7節に、「ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。」とある。「コリントの信徒への手紙」は、パウロの直筆とされる書簡の一つ。
- (11) 原文には、「特伯国法」とある。「特伯」の原名は未詳なるも、古代ギリシヤ中東部のポイオティア地方の南東部の都市国家テーベのことか。
- (12) 原文には、「辣責得滿」とある。原名は未詳。
- (13) 原文にも、「靈魂」とある。
- (14) 原文には、「靈」とある。
- (15) 原文には、「鬼魔」とある。

(16) 原文には、「神魂」とある。

(17) 中国では古代から、人は魂と魄とが合わさることによって生存し、両者が離れることによって死ぬと考えられた。生きているときには、魂は陽の気で精神を司り、魄は陰の気で形体を司るとされ、死ぬと魂は天に昇り、魄は地に降るとされた。たとえば、『春秋左氏伝』昭公七年の伝に、「人生まれて始めて化すを魄と曰い、既に魄を生じ、陽を魂と曰う。」とあり、同孔穎達の疏に、「形の靈なる者、之を名付けて魄と曰う。」「氣の神なる者、之を名付けて魂と曰う。」とある。また、『礼記』郊特牲篇に、「魂氣は天に帰り、形魄は地に歸る。」と、同礼運篇に、「体魄は則ち降り、知氣は天に在り。」とある。

(18) 原文にも、「靈魂」とある。

(19) 原文には、「神道」とある。『易経』觀卦に、「聖人は神道を以て教えを設け、而して天下服す。」とある。人知では測り知ることのできない不思議な法則のこと。

(20) 『論語』衛靈公篇に、「過ちて改めざる、是れを過ちと謂う。」とある。

(21) 『論語』為政篇に、「義を見て為ざるは、勇無きなり。」とある。

(22) 原文には、「天刑」とある。天の与える刑罰のこと。

第四篇 「常に死の時のことを考え、死後の審判のために準備をする」

翌日、翰林院庶吉士である徐光啓が再び私の寓居に訪ねて来て言った、「昨日、あなたが取り上げられたことは、本当に人生で何よりも危急のことからであり、私はお言葉を聞いて驚き畏れました。一体「死後の苦難を」免れることができるのでしょうか。どうかその道理を要約して具体的に条目としてお示しく下さい。記録して自ら戒める首箴にしようと思います」と。

私は言った、「常に死の時のことを考えれば、五つの良いことがあります。一番目は、「死の時のことを考えることよって」心身を収斂して死後の大いなる災いから逃れ出ることです。私が思いますに、終わりを知ってこそ始めを善くすることができます¹⁾。死のことを理解してこそ善く生きることができます²⁾。家の財産が少ないことを知ったならば、節約して使うでしょう。[それと同様で残された]寿命が長くないということを知った

ならば、少しの時間も無駄に過ごそうとしないものです。そうでない者は、霧の中を歩いているようなもので、前後も分からず、目の先を見ているだけです。船頭が船を操るには、必ず進路があり、地図があります。毎日、既にどのくらい進んだかを記録してこそ、あとどれ位であるかが分かるのです。船の後に座つていてこそ、船の前のことが分かるので、それによつて舵でかげんを取るのです。我々が人生の道のりを歩むのも、これと同様です。毎日、どれくらい生きたかを記録して、自分を人生の終わりのところに置いてみてこそ、一生のことをはかり考え進んでいくことができるのです。また、魚が尾を使つて潜つて、海の道を開き、鳥が翼を使つて飛んで、空中の道を飛んでいくようなものです。この世を生きるのは、「魚が」海を泳ぎ、「鳥が」空を飛ぶようなものではないでしょうか。死の時の終わりのところから人生を思い語るのでなければ、「死後の苦難を」免れることは難しいのです。常に心が死の時にあつてこそ、生きている間に何を為すべきかが分かるのです。あることを生きている間に行うべきかどうかについて知りたければ、私が死ぬ時、そのことを生きている時に行い得るよう願うかどうかを考えればよいのです。このように教え導くことが、ひしひしと身にせまつてこないことがあります。か。古代の賢者であつた裴羅谷^③は六年間墓の中にいましたし、伯辣漫人^④の風俗では、家の門の外に墳墓があり、出入りするたびに振り返つて見るのです。西洋にある同じような幾百もの国では、たいてい街の中に死者を埋葬します。そもそも誰もが死のための準備を忘れることを懼れて、計画を立てて自らを引っ張り目覚めさせるのです。

昔、西の隣国に賢い王の言い伝えがありました。その年代や名前は伝わっていません。その時、君王は老いて、国を継ぐべき子どもが一人いました。その子は輕佻浮薄で敵かな態度がなく、でたらめで、わがままで、国民はそのことを心配していました。官吏が王に王子を戒め諭すように請願しました。王はあらゆる方法で戒めました。王は従いませんでした。そこで、王は裁判官に命じて言いました、「王の世継ぎが重大な法を犯した

ならば法律によつてこれを取り調べ、決して赦してはならない」と。何日も経たないうちに、王子は以前のよう
に邪悪なことを行つたので、裁判官は「彼を」拘留して取り調べたところ、刑罰は死刑に相当しました。「死刑
の」当日になつたので、「王子を」引き出して刑を行おうとしました。王子はことが窮まったのを悟つて、王の
所に行つて父王と別れをしたいと願いました。「彼は」許されて王の面前に出て訴えて言いました、「王の子で國
の世継ぎであるのに、身分の低い者と同様に処刑されて死ぬのは、道理にかなつたことでしょうか、人情にか
なつたことでしょうか」と。王は涙を流して言いました、「私ではない、法律」がそうさせるの」だ。私が親子
の恩愛を忘れようか。それならば、お前の目下の処刑をしばらく免除して、お前を七日の間、王としよう。七日
間、したい放題楽しいことをやるがよい。七日が過ぎたら自分で裁判官の所に行つて法に服せ」と。言い終わる
や、ただちに王の衣裳と冠を取つて王子にまとわせ、王位に就かせ、百官すべてにその命令を聴かせました。「そ
して」自らは身を引いてくつろぎ、いっさい国政に関与しませんでした。ただ一人の従僕を王子に付け、毎日夕
方になると、「七日の期限まで、もう既にこれだけの日が過ぎました」と言わせました。このような日々の中で、
王子は飽くことなく快楽に熱中しましたが、夕方になつて従僕の戒めを聞くと、ただちに大いに驚き醒めて、憂
いに耐えませんでした。七日目になつて、期限が迫つてくると、遊樂をやめるように求め、喜び楽しむことがあ
りませんでした。王は期限が来ると出ていって、ただちに王子に尋ねました、「七日間の楽しみはどうだったか」
と。「王子は」言いました、「何が楽しいことがありますよ」と。王は言いました、「一国の権力も、一人の樂
しみを与えることができないというのか」と。「王子は」答えて言いました、「その通りで、毎日夕方になると一
人の従僕がやつて来て、処刑されるまでの日数を示して、我が心を突き刺しました。そこで、毎日私の命が終わ
るのだと分かり、ついに楽しみは消え去ってしまったのです」と。王は言いました、「人は誰でも日々終わり
(死)に向かつていない者はない。寿命は同じでないが、均しく少なくなっているのだ。これ以後、お前は國を

治めることができよう。かつてお前が犯した罪は、大赦しよう。ただ、今後もこの従僕に、この七日間と同様、毎夕お前の心を戒めさせることにする」と。国中の人々は、これを聞いて大喜びしました。王子は王の教誨と恩愛に感謝して、前行をことごとく改め、父が亡くなると代わって即位し、賢君となりました。このことから、度重なる数多くの教誨も、その心を変えることはできませんでしたが、七日間の死に対する思いがそれを可能にしたということが分かります。このような従僕を置くことは、智者にはなくてはならないものです。世事がその心を奪って「死のことを」忘れさせることを恐れるからです。

二番目は、「死の時のことを考えることによつて」淫（みだらな）欲が徳行を損なうのを鎮（しづ）めることです。五欲^⑤の炎が心に起きると、徳は危うくなり、欲に焼かれ壊されてしまいます。死の時の思いは、湧き出す大いなる泉で、その「欲の」さかんな炎を滅ぼします。ですから、色欲（男女の情欲）を懲らしめ戒めるための唯一最上の良薬なのです。私は生きているときには、犯した罪に対する判決が既に決定した犯罪人のようであり、牢獄の中から刑が行われるために刑場に向かつていて、自分が負っている責めを標榜して進んでおり、道中でたまたま喜び楽しむことに会つたとしても、何の楽しいことがありません。

聖ヨハネ^⑥は、一つの譬えをこしらえて、世間の人々が礼に外れた楽しみを得ようとしているさまを言い表しましたが、それは非常によいものです。彼はこのように語っています。「昔、一人の人が荒野を旅していて、突然一匹の毒龍がつかみかかろうとしてきた。手向かうこともできないので、即座に走ったが、龍はただちに追いかけてきた。大きな落とし穴までやって来て、逃げることができなかったため、その穴の中に隠れようとしたところ、幸いに穴の入口の傍らにわずかな土があつて、土から小さな木が生えていた。そこで片手で木の枝を握り、片足でわずかな土を踏み、ぶら下がった。穴の下をのぞいてみると、大きな虎と狼が口を開けて飲み込もうとしていた。また、うつむいてその木を見ると、黒と白の沢山の虫が木の根をかじり取つてしまおうとしていた。絶

体絶命の状態であつた。突然仰向いて見ると、上の枝に蜂の巢があつたので、たいそう喜んで、片手でそれを取つて蜂の蜜を楽しんで食べ、すっかり危険を忘れてしまった。残念なことに、蜜を食べ終わらぬうちに、木の根が切れて、その人は穴に落ちて虎と狼に食われてしまった」と。⁷⁷

この譬えは何を語っているのでしょうか。人が荒野を旅しているのは、あなたと私がこの世界に生きていることとです。毒龍が私を追いかけるのは、影が形を離れないように、死の時が随所で人を追いかけていることです。深い落とし穴は、憂いと涙に満ちた地獄の苦しい谷のことです。小さな木は、私のこの生命のことです。わずかな土は、私の肉体のことです。虎と狼は、地獄の悪魔です。黒と白の虫が木の根をかじっているのは、昼と夜がめぐつて我が命が短くなつていくことです。蜂の巢は、この世の空虚な快樂のことです。哀しいかな、人間は愚かにも喜んでこの快樂をつかみ、迷つてしまつて大いなる危険を忘れ、敢えて自分を救おうとしないのです。何と哀しいことでしょうか。

西洋に、二つの泉が近いところにありました。一つの泉の水は、人が飲んだ途端に笑い出し、死ぬまで止まりません。もう一つの泉の水は、人が飲んだ途端に笑いが止まり、その病をいやします。人が笑つて死に至らせる水、それは人を迷わしてその心を破壊するこの世の快樂です。笑いを止め病をいやす水、それは死の時のことを考える心に他なりません。速やかにその水を汲まないうでよいでしょうか。

三番目は、「死の時のことを考えることによつて」財貨や功名や富貴を軽んじることです。そもそも、物は私が所有するものではなく、私に付随するものでもありません。すべてが借り物にすぎません。どうして恋慕うにたりましようか。死後、人から離れるものです。死後においては、財貨を用いることもなく、財貨を重んじることもないのです。私は、どうして死後において尊ぶものを集めないことがありますでしょうか。惜しいことに、考へのない人は、自分の本来のありかではない所で名誉を受け、自分の本来のありかでは苦難を受けます。そ

もそも物について、あなたは どうしてそれを得たという楽しみを味わって、失ったという恨みを懐かないのでしょうか。それが来ることを見ずに去ることを見、前面を見ずに背後をご覧なさい。そもそも進んでは、しばらく偽の楽しみを味わい、退いては大いに真の憂いを遺すことになりませう。『聖書』に、「財産を持った人は眠りから覚めると、手の中には何もないのである」⁸とあるのは、人が夢の中で手にいっぱい金銀をつかんで、大喜びして、急に手を堅く握りしめても、突然目覚めて見れば、手の中は空っぽである、ということを言っているのです。『聖書』では、「人が持っている財産」と言わずに、「財産を持った人」と言っています。それを得ようと貪る者は、私が財産を使うのではなく、財産に使われてしまうのであって、財産の奴隷となるのです。『聖書』では「財産を得た」と言わずに、「夢の中で財産を得た」と言っています。思いますに、その富が百年も続くものだとしても、一晩の短い夢のようなものに他ならないのです。さらに、その実態を言い表すならば、一つの昔の話で極めて明白になるでしょう。

昔、一人の男に三人の友人がいましたが、相手に対する感情はそれぞれに異なっていました。一人は、自分自身に對するよりも深く敬愛していました。一人は、自分自身に對するよう敬愛してました。もう一人は、非常に薄情で、めつたに会いませんでした。突然、大事件に遭い、国王が怒つてこの男を尋問し投獄しようとした。男はそれを聞いて、ただちに一番目の友人の所に急いで行って、自らの窮状を訴え、昔を思い出して手を差し伸べてほしいと願いました。その友人は、「今日は、君を助ける暇がない。他の友人と遊びに行く約束をしており、ここで待っているところだ。ただ、君に一揃いの服と一輛の車を贈ることはできる」と言いました。男はがっかりしてため息をつき、二番目の友人のところに行き、益々悲しんで泣きながら、自らの災難を訴え、前の友人のようにせず何とか自分を災厄から救ってくれるように願いました。その友人は、「今日はたまたま遠出をするので、暇がない。ただ君と一緒に途中まで行こう。遠くまで行けても、役所の門までで、門の中で取り調

べを受けている時は、一緒にそれを聞くことはできない」と言いました。そこで男は益々苦しんで、以前の友人選びが間違っていたことを後悔しました。やがて、彼は最も疎遠だった友人が、もともと裏表のない人物であったことを思い出しましたが、自分を救うことができるかどうかは分かりませんでした。男はその友人の所に行つて、自ら恥じることをどうしようもできませんでした。やむを得ず、先ず二人の友人から受けたことを告げ、さらに昔の薄情さを自ら咎め、気にしないでほしいと求めました。「そして」どうか一日の善を思い、大徳によつて私を見捨てないでほしいと願いました。友人は、「私はもともと交流は少なかったが、いつも君のことを思っていた。今、君は心配する必要はない。このことは、私がかまくやつて、君を救うことができる。私を好きな者のためにがんばろう」と言いました。言い終わると、ただちに国王の所に向きました。この友人は、国王から非常に寵愛されていきましたので、一言で男は赦され、何の心配もありませんでした。これはどういうことでしょうか。

男が大事件に遭つたというのは、人が死ぬ時に、天主（上帝）が我が一生の不善なる行いを裁かれようとすることです。その三人の友人とは、財貨と、親戚と、徳行のことです。そもそも財貨と屋敷と田畑は自分で動くことができせん。私の喪服や棺桶になるだけです。そもそも親戚や友人は、私を山間や墳墓の所まで送つてくれますが、中に入ることはできません。ただ、徳行や陰徳は、人々は非常に重視はしませんが、かえつて死後の危難を守り、私を救うことができるものなのです。このことから、死の時を考えることは、人々が世間にある物の虚実を明らかにできるよう導くものであることが分かります。私に随つてくるものは、私のものであり、真実なるものです。私に随つてこないものは、私のものではなく、虚偽なるものです。

サラデイン⁽¹⁰⁾は、西洋の七十国を統べる王でした。亡くならうとする時、埋葬の衣裳を手に取り、一人の宰臣に命じてこれを旗竿の端に掲げて、都中を廻り、道ごとに大声で、「七十国の王サラデインは、今、世を去つ

だが、この衣裳一枚を身につけただけだ」と大声で呼ばわせました。ああ、どうしてこの通りの意味でないことがありましようか。

野狐のぎゆうが一日中餌えさにありつけず、痩やせこけてしまい、鶏小屋に入って食べ物を盗もうとしましたが、門が閉まっていたり入ることができませんでした。ためらっているうちに、突然何とかその身が入るようなわずかな隙間すきまが見えたので、すばやく身を伏せて中に入りました。数日して十分食べたので帰ろうとしたが、身体が肥えてしまつて、腹が非常に張りだして、隙間に入りませんでした。主人に見つけられるのを恐れて、やむを得ず、数日間食べなかつたので、身体が最初に入ってきたときのように痩せ、ようやく出ることができました¹¹⁾。この狐は何と賢いのでしょうか。我々はこれをお手本として習うべきではないでしょうか。

そもそも人の子がこの世に生まれてくるときは、空っぽで何も所有していません。生きていくうちに、財貨が集まり富裕になります。死のうとするときになって、集めてきた財貨は自分と一緒に持つて出ることではできません。どうしてあの狐の賢さに習って、自分で財貨を捨て去つて「この世から」出やすくしないのでしょうか。何が本當の富ですかと問われれば、必ずこう答えるでしょう。「色々と重要な物がありますが、常に存在して壊れることがないものが本當の富です」と。ですから、良き田畑、豊かな産物は、富める者の本業とすることができません。そもそも田畑からの産物は人にとつて、火も焼くことができず、水も流すことができず、盗人も背負つて逃げることができず、何年経つても損なわれず、あらゆる物の中で唯一堅固で恒久なものです。ですから、富を貯える人は、これを宝とします。ましてや、更に万倍も堅固で恒久な人の徳においては言うまでもありません¹²⁾。徳は、水や火や盗人を恐れることもなく、時が経てば経つほど堅固になり、離れていくことがなく、生にも死にも私に随つてきます。これこそ、まぎれもなく人の大いなる本業なのです¹³⁾。

四番目は、「死の時のことを考えることによつて」私の傲慢な心を討ち滅ぼすことです。傲慢な気持ちは、あ

らゆる徳を損なうものです。傲慢を養う者は、もとより道心が壊されます。そもそも傲慢の根底をなすのは、本来の脆弱さです。虚偽を真実と見なし、無を有と見なし、他者を自己と見なします。ですから、常に死の時のことを思い、自らをくりましたり自らをあやまつたりしないことです。孔雀は、その羽は五色でこの上もなく美しいのですが、その足だけは醜いのです。かつて太陽に向かって尾羽を張ると、日光が輝き五色の輪を作りました。振り向いて自ら喜び、この上なく傲慢な気持ちになりましたが、突然下を向いて足を見た途端に、その輪をおさめて気持ちが悪く感じて「羽を拡げること」をやめました。傲慢な者はどうしてこの鳥に習わないのでしょうか。どうして自分の足を見ないのでしょうか。足とは人の末尾で、死の時のことです。死の時に当たって身体の美しさや、衣裳の見事さ、心の聡明さ、権勢の高さ、親の尊貴、財産の豊富さ、名声の高さなど、すべてどこにあるのでしょうか。どうしてあなたの軽薄な輪をおさめないのでしょうか。

昔、西洋にアレクサンドロス¹⁵という名の大王がいました。百国を制覇し、領土は数万里に及び、その富は数えきれないほどで、心は非常に傲慢でしたが、それでも足りないかのようにでした。亡くなってから、その豪華な埋葬は、華美を極めつくしたものでした。その時に有名な賢者がおり、その墓を見て譏つて言いました、「あの方は以前は土を踏みつけていましたが、今は土に踏みつけられています。以前、彼は金玉を収めていましたが、今は金玉が彼を収めています。以前は、世界も「彼の所有するものを」納めきれないほどでしたが、今や土に三尺の穴があれば「彼の遺体を納めるのに」十分です」と。

ああ、この世に生きている時には尊卑「の違い」がありますが、死んだ後には尊卑「の違い」はありません。実に象棋「の駒」のようなもので、局盤で動かされている時は、将と卒は位も違い、「動く」道も異なりますが、勝負が終わって局盤がひっくり返されると、位も道も区別はありません。目は何でも見ることができますが、ただ自分を見ることができないだけです。自分を見る方法は、鏡に照らすことです。人は何でも知ることができますが、

すが、ただ自分を知らないだけです。自分を知るには、結局のところ方法がないのでしょうか。死者の鬮體を鏡として照らしてみる事です。彼は以前、今の私のようにであり、私は将来、今の彼のようになるのです。かつて、私に一人の友人がいて、いつも鬮體の姿を画いては書齋に懸けて、自らを警めていました。どうして図書や古器を飾ることを喜ばないことがありますか。「自らを警めるためにあえてそのようにしていたのです。」

五番目は、「死の時のことを考えることによつて」死をみだりに畏れずに安らかに受け入れることです。造物主「である天主」は一つの物を造るたびに、それぞれに自分を愛する心を与えました。これは霊的な働きを持つ人間と霊的な働きを持たない動物との区別なく、すべての物に備わっていますから、死を畏れて生を願うという本性はすべての人に同様に備わっています。そうですから、生も死もどちらも天主の命令に従うのです。人は自分で死を求めることはよくないことなのですが、無理やりに生を求めるときもよくないことなのです。なぜならば、天主はもともと人がその死を自分勝手にすることをさせませんでした。ちよつと兵士が司令官の命令でなければ隊列を離れようとしないうなものなのです。もし結局死を願わなければ、それは生まれてきたことを後悔しているからです。そもそも生と死の主「である天主」は、あなたにこの生を貸し与え、実際、死によつてその生を返すよう、ひそかに約束をしているのです。割り符の一方が彼（天主）の手に握られているとすれば、死を願わなければ、約束に背いて、自らが生まれてきたことを後悔することになるのです。財貨を貪るのはよくないことですが、生を貪るのはよいことでしょうか。約束に背いて他人の財貨に頼ろうとするのはよくないことですが、約束に背いて天主から与えられた生に頼ろうとするのはよいことでしょうか。

我が故郷の亜入西勞氏¹⁶は、西の果ての名将ですが、オリュンポス山¹⁷を越えた時、ある町にさしかかりました。町は世界でも最も繁盛^{はんじやう}をしていました。ある人が、町を見物するように勧め、「あの町には」あらゆる商品が備わっています」と言ったところ、「彼は」辞退して、「長生きを売る者がいるなら、私は「それを買いに」行

こう」と言いました。何と浅はかな人であろうか。商品せうひんを貪らずに、「長」生きを貪り、さらに遊樂を貪るとは。一方、純真な学者じゆんしんがくしやがおりました。国王から広大な領地を賜ったので、使者に尋ねて言いました、「王様は私にこの俸祿を下さいましたが、それを永久に受けるために、さらに私に寿命を下さるのでしょうか」と。使者は「答えて」言いました、「いいえ、それは天主からの恩寵です」と。学者は言いました、「そうでありますならば、私は天主の所に行ってお仕えし、自分の行いを修め、死後には天「主からの俸」祿を受けようと思えます」と。辞退して「その領地を」拝領しませんでした。

そもそも永遠に生きることを願うならば、永遠に生きる道を進んで求めてこそ可能なのです。あなたは死者の世界にいるのを、永遠に生きることに誤っているのです。そもそも死の時はわずかな間に他なりません。厳しいものであっても、すぐに終わるのです。どうしてまたこれを畏れるのでしょうか。私には死がないわけにはいきません。ですから、死の懼れを免れることはできません。狂者と嬰兒は死を懼れませんが、私は反対にそれができる。彼らは愚者で私は智者です。愚者は人に安心を与えることができませんが、智者は人に不安を与えません。何と哀しいことでしょうか。そもそも本当に智恵のある君子は、死の準備をして、死を懼れません。死の時のことは、いつもその心から離れません。たとえば名将が常に戦いのことを忘れないようなもので、それは敵に対して準備をしているのです。そもそも死の時を考えることは、最初は懼れを以てやって来て、続いて慰めを以てやって来て、最後は喜びを以てやって来ます。武人が都の試合に臨む際に、馬に驚くことがあったならば、数日前に馬囲いの中で習って、驚かないようにします。試合の日になると、馬については既に習っていますので、驚くことはありません。人の心が死の時に對するのは、馬に驚くようなものです。私は死を思う心を以て囲い「すなわち限られた人生」の中で習って、本当に死ぬ時になれば、既に「死のことに對して」習っているので、大事を誤「って畏れ」ることはありません。そもそも人が死を畏れるのは、死の瞬間ではありません。むしろそ

の瞬間の後に始まるものなのです。この畏れは、私を最もよく善に導くものですから、これを存養しなければならず、決して退けるべきではありません。試しに考えてみてください。今から後、何日間かして、私が一生の間、日々刻々、目で見えるもの、耳で聞くもの、口で食べるもの、鼻でかくもの、手足で動かすもの、知能で論じるもの、心で愛するものを、それが道理に適っているか否かを問わず、一つ一つ漏らすことなく、間違ふことなく数え記して、それが善であるか悪であるかを詳しく調べ、判断するならば、誰か懼れない者がいるでしょうか。懼れたならば、必ず心を引き締め、行いを慎むように助ける者がいるでしょう。

古代、我が故郷の国に賢者がいました。八十余年間、修道生活を送りましたが、死に臨んで体中で懼れおののきました。傍らにいた人がその理由を尋ねたところ、「彼は」答えて言いました、「この懼れは今に始まったものではありません。常日頃から私にあつたものです」と。「傍らの」人が言いました、「誰もが皆、先生は既に道を窮めておられる、と言っておりますが、どうして懼れられるのでしょうか」と。「賢者が」答えて言いました、「天主の審判は厳しいものです。その耳「[」によって聞かれ」目「[」によって見られるもの」は、私も他の人と同様なのです。懼れないでいられますようか」と。

また、古代に一人の人がいました。死んで二日後に生き返りました。それから十余年間生きましたが、ついに一言も喋ることもなく、笑顔を見せることもなく、黙って座り静かに修養をしていました。彼が再び死ぬ日に、友人たちが敢えて「そのわけを」尋ねたところ、「彼は」他の人は死後の審判を知りません。どうしてそのことを教えることができましょうか」と言うばかりでした。語り終わると死にました。

思いますに、君子はこの世に対して関与しません。関与しないということは、執着しないということです。執着しなければ、これを捨てても悔やまないということです。その心は、人間世界にはなく、天上に向かっていて、天を我が家としています¹⁹。旅人は我が家に近づこうとしてしていると聞けば、悩みがなくなるどころか、大いに

喜びます。この身体を牢獄と見なし、手かせ足かせと見なすならば、それが壊れて担うことがなくなるのを見るのは、ちょうど囚人が牢屋の扉や壁が裂け、手かせ足かせが壊れるのを見て、束縛から解放されることを願うようなものです。故郷に帰ることができるのに、どうして悩むことがありましようか。ただ努め励んで日々を慎み、取えて自ら安心したり賢明ぶったりせず、それでもなお徳が完成しないのを畏れるのです。ですから、勤めて倦まずによく働いても、それでもなお不十分とするのです」と。

徐光啓が言った、「ああ、これはすべて真心のこもった親切なお言葉で、確かに世の人々を教えるために大いに助けとなるものです。今より後、私は死のために準備する事柄が分かりました。世間の人々が死のために準備するのは、頑丈な棺桶を探したり、善き墓所を占ったりするだけです。死後に天「主」の台下で受ける厳しい審判のことを、誰が考えるでしょうか」と。

私が言った、「それは何と迂遠なことでしょうか。軽んずべきことを重んじ、重んずべきことを軽んず、これ以上の禍いはありません。「周の」文王の墓は「都があつた」豊鎬⁽²⁰⁾にあります。周公は詩を作つて後王「である成王」に告げて、「文王は「天の」上に在^{いま}し、ああ天に昭^{あら}わる」⁽²¹⁾と言っています。ですから、豊鎬の墓にある文王「の遺体」は、文王の灰と燃えかすでしかありません。私は自分の靈魂⁽²²⁾のことを忘れて、自分の灰と燃えかすだけを気にかけるのでしょうか。そもそも遺された体魄は天地に朽ち果てるものであり、一生そのことを思うのは、何と異常なことでしょう。棺桶が覆わないものは、もとより天がこれを覆います。どうして薄情であることを気にしましよう。しかし、親を手厚く葬るのは、もとより人情であり、必ずしも譏る必要はありません。遺体を丁寧に扱う者は、自分の靈魂⁽²³⁾を粗末にしてはならないだけです。

この世はただひとたびの人生であり、死後の永遠の苦しみと楽しみは、いずれも今から作られるものです。この世において、私に不善があれば除くべきで、善があれば増すべきであり、死後には決してできないことなので

す。死後は「生前の善悪に対する」賞罰を調べ正す時なのです。王法を犯さず、人に対しても罪を犯さずに、またま生かすか殺すかを司る所（裁判所）の前を通り、法廷に入っても、なおしばらくは畏れてびくびくするものです。ましてや生涯行ったことが天命に背かないわけにはいかず、天「主」に対して罪を犯したのであれば、死に臨んで天地の主宰者「である天主」の厳肅なる台座の前に至って、万世までもの罪過を取り調べられようとするのに、果たして落ち着いていられますでしょうか。考えてみて下さい。思いがけずに「罪を」免れることを妄りに望むのでしょうか。「罪を犯したことを」自分自身で分らないで「そのことを」信じないのででしょうか。それは何という誤りでしょうか。」

そもそも死の時の準備をするためのあらゆる方法は、三つの和解にあるのです。三つの和解とは、天「主」との和解、他人との和解、自分との和解がそれです。「天」主に対して罪を犯すならば、逃れようがありません。「天」主によって祈るのでなければ、誰に祈りましょうか²⁴。ここ（天主）に捉えられているのであれば、解放を願う相手もここ（天主）なのです。つまり、天主が贈って下さった尊い教えに照らして、その後悔を習い、自分の前非を責め、聖なる戒めを守るように心がけ、それによって「天」主の怒りを鎮め、「天主の」恩寵²⁵を招き寄せるのです。これが「天」主との和解なのです。

私が無義によって他人の財物を所蔵していたならば、ただちにそれをその人に返します。かつて他人を譏り、その人の名譽や行為を傷つけたのであれば、ただちに真実の言葉で取り持って、回復させるのです。「また」かつて他人と互いに争い、心が傲り^{おほ}ねじて敵対していたならば、ただちにおおめに見て相手を赦し、仲直りをして仲良く交際するのです。これが他人との和解なのです。

およそ酒色で自分の身体を汚し、醜い思いや悪しき感情で自分の精神²⁶を惑わしていたならば、ただちにそれらを洗い清め、新たに善を修め正しい道²⁷に立ち返るよう心がけ、また、自分を不義に誘惑するものがあつた

ならば、それを遠ざけ断ちきつて未練を残さないようにします。これが自分との和解なのです。

ああ、もし天罰⁽²⁸⁾を既に受けている死者が、今この世に生き返ることができたならば、わずかな時間でも前非を改め、心を道徳に移し、どんな代価を支払うことも拒まず、どんな苦しみ心が満たしても、それを代わり受け取るでしょう。もしそれができなければ、心を開いて推し量り死の時の準備をする模範を、私が示しましょう。もし速やかにそれを行おうとしないというのであれば、一体どういう考えなのでしょうか」と。

【注】

- (1) 原文には、「終わりを知れば乃ち能く始めを善くせん。」とあるが、『易経』繫辞上傳の「始めを原^{もと}ねて終^{はら}わりに反^{かへ}る、故に死生の説を知る。」を逆説的に表現した言い方であろう。
- (2) 原文には、「死を知れば乃ち能く生を善くせん。」とあるが、『論語』先進篇の「未だ生を知らず。焉^{いず}んぞ死を知らん。」を逆説的に表現した言い方であろう。
- (3) 原文には、「裴羅谷」とある。原名は未詳。
- (4) 原文には、「伯辣漫人」とある。原名は未詳。
- (5) 五欲は、財欲・色欲（男女の情欲）・飲食欲・名誉欲・睡眠欲を指す。
- (6) 原文には、「若翰聖人」とある。
- (7) この寓話に関しては、李爽學『中國晚明與歐洲文學——明末耶穌會古典型證故事考證』（中央研究院聯經出版公司、二〇〇五）三八〇頁以下、松原秀一『中世ヨーロッパの説話——東と西の出会い』（中央公論社、一九九二）を参照。また、仏典との関係については、小堀桂一郎「日月の鼠——説話流伝の一事例」（『紀要比較文学研究』十五、東京大学教養学部、一九七六）、村岡典嗣「二鼠譬喩談と平田篤胤」（『文化』第一巻、第二号、原實「丘井の喩」）（『東洋学報』第六十六巻）等を参照。それによれば、Mahabharata XI, 5-6、また、仏典の『寶頭盧突羅闍為優陀延王説法經』に見られる。なお、村岡典嗣は、聖ヨハネをJohannes Damascenusとしている。
- (8) 『旧約聖書』の「イザヤ書」第29章8節に、「飢えた者が夢を見た。見よ、彼は食べていた。だが目覚めてみると、彼は空腹のままであつた。渴いた者が夢を見た。見よ、彼は飲んでいていた。だが、目覚めてみると、疲れ果てて渴いたままで。」とある。
- (9) この寓話については、前掲の李爽學『中國晚明與歐洲文學——明末耶穌會古典型證故事考證』七〇頁以下を参照。

- (10) 原文には、「沙辣丁」とある。原名は未詳なるも、アイユーブ朝(二七一―二六〇)の創設者サラフ・アッディーン(二二三八―一九三、サラディン)のことか。
- (11) この寓話については、前掲の李爽學『中國晚明與歐洲文學―明末耶穌會古典型證故事考詮』九〇頁以下を参照。この寓話と類似の話は『イソップ寓話集』(中務哲郎訳、岩波文庫、一九九九)第一部の二四「腹のふくれた狐」に見える。
- (12) 『新約聖書』の「マタイによる福音書」第6章19―21節に、「あなたがたは地上に富を積んではならない。ここでは、虫が食つたり、さび付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗み出したりする。富は、天に積みなさい。ここでは、虫が食うことも、さび付くこともなく、また、盗人が忍び込むことも盗み出すこともない。あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ。」とある。また、同「ルカによる福音書」第12章13節以下の「愚かな金持ち」のたとえの中で、「しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いつたいただれのものになるのか』と言われた。自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」とある。
- (13) 『易経』繫辭上伝に、「久しかるべきは賢人の徳、大いなるべきは賢人の業なり。」とある。
- (14) この寓話については、前掲の李爽學『中國晚明與歐洲文學―明末耶穌會古典型證故事考詮』五七頁以下を参照。
- (15) 原文には、「歴山」とある。古代マケドニア王(前三五六―前三三三)。エジプト、ペルシアを制覇し、中央アジアからインド北西部へと進行する。
- (16) 原文には、「垂入西勞氏」とある。原名は未詳。
- (17) 原文には、「阿林波山」とある。テッサリアとマケドニアとの国境にある峻峰。古代ギリシア神話の神々が住んだとされる山地。
- (18) 原文には、「真儒」とある。
- (19) 『畸人十篇』第二篇、『天主実義』第三篇を参照。「現世は我々の仮住まいであつて、永遠の住まいではありません。我々の本当の住まいは現世にはなく、来世にあり、人「の中」にはなく天「主の中」にあるのです」(『天主実義』第三篇の2)とある。『新約聖書』の「フィリピの信徒への手紙」第3章20節等を参照。
- (20) 周の文王は豊(陝西省郿県の東)に都を置き、武王は鎬(陝西省長安県の南西、鎬京)に都を遷して国号を周とした。
- (21) 『詩経』大雅・文王篇の冒頭に、「文王、上に在し、於天に昭あわるとある。この篇は、周王朝の祖である文王の功徳を称え、文王の後を継いだ武王の子である成王を誡める意味を込めて、武王の弟で成王を補佐した周公が作ったとされる。この句は、『天主実義』第四篇にも引かれており、古代の人々が死者の靈魂を永在不滅と考えていたことの証拠としている。また、同第六篇にも引用し、「上に在し」とは天国(「天堂」と表記)のことであるとされている。

- (22) 原文には、「精霊」とある。
- (23) 原文には、「神霊」とある。
- (24) 『論語』八佾篇に、「罪を天に獲れば、禱る所無きなり。」とある。
- (25) 原文には、「神寵」とある。
- (26) 原文には、「心霊」とある。
- (27) 原文には、「道体」とある。
- (28) 原文には、「天刑」とある。第三篇の注(22)を参照。

〔附記〕 本稿は、平成二十三年度科学研究費助成金(基盤研究(C))による『崎人十篇』とその朝鮮・日本における思想的影響に関する研究』で得られた研究成果の一部である。